

渡辺克己著



第十四章・浜町かいわい

## 第十四章 ● 浜町かいわい

【写真】大正十年、新川で開いた  
九州沖繩八県連合共進会の中央会場

- ・ 瓜生島の陥没
- ・ 遠のいた海岸線
- ・ 難航した
- 工場誘致
- ・ 別府から
- ガスを引く
- ・ 京泊の松並木
- ・ 弁天さま
- 放浪記
- ・ 浜町つ子気質
- ・ 沖の浜の神々
- ・ 残っていた
- 船番所
- ・ ひき船に乗って
- ・ 競馬と共進会
- 大分川築港論

奥付け／デジタルブックについて



### 発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正十年新川で開いた九州沖縄八県連合共進会の中央会場

## 瓜生島の陥没

浜町一带のことを、いまでもとしよりは「沖の浜」と呼んでいる。こんなことをいっただら、おこられるかもわからないが、浜町の人の悪口をいうときは「沖の浜のジャコ頭野郎」だった。この「沖の浜」の歴史は古い。郷土史によると、陥没した瓜生島から「沖の浜」の名を移したということになっている。

瓜生島という「島」があつたかなかつたかという論議は、郷土史家の間でずいぶん戦わされたようだが、いまでは「瓜生島はあつた」ということに落ち着いている。

この瓜生島は「東西三十六町南北二十一町、周囲およそ三里ばかり、漁家千余軒、居民五千人余」と伝えられている。これが慶長元年七月の大地震で一朝にして海底に没してしまったのだ。

「豊府聞書」に書いてあることを現代文になおすと次のようになる。

「慶長元年七月十二日午後四時、大地震が起こり、府内はところどころ地が裂け山がくずれた。そのため高崎山のいただき大きな石はことごとく落ち、その石が互いにこすりあつて火を発した。やがて地震がやみ、府内の人々は安心して入浴する者や、夕食をとる者などがあつた。ところがにわかには海がどうどうとどろき、井戸の水はかれてしまった。とたちまちにして高波が府内を襲つて同慈寺の薬師堂のみが水中に見えるだけというありさまであつた」

という大地震と高波の恐怖下に府内はたたきこまれたので

あった。このとき瓜生島は陥没したのであって、そのありさまをこう記している。

「勢家村から二十町北に瓜生島、あるいは沖浜町というのがあった。その町は東西を縦とし、南北に本町、新町、裏町という三筋の町があつて、農工商漁の人々が住んでいた。この瓜生島がことごとく沈んで、おぼれ死なないものは、わずかに七分の一。小船に乗り、あるいは流れる家にすがり、あるいは浮木につかまって西南の山ぎわの犬鼻辺や、蓬萊山などの高地に流れた。いずれもはだかで、食べるものもなく、かろうじて勢家村の親類縁者や知人をたよつてきた。城主早川主馬首はこれをあわれんで、米や衣類、金銭を与え、勢家村の中に家を建てて住ませた。被災者はその地を再び沖浜町と名づけて住みついた」

これが沖の浜の起源というわけである。威徳寺も瓜生島にあったのがそのとき現在地に移つたといわれ、瓜生島から移し植えたと伝えられる名松が境内にあり「法声の松」と称えられていたが、戦災で本堂とともに焼失してしまつた。

## 遠のいた海岸線

明治大正年代の浜町は、いま小田鑄造や岩田鉄工がある中心の道路が一本東西に抜けて、これにつながつて威徳寺前の通路（あんなに広くなかつた）と住吉神社前のあぜ道のような細い道路が南北に走っているだけで、これに沿つて畑や、漁家の集落があつた。

地名も、かさ（威徳寺付近）今出町（漁業会館の南側付近）七本木（平松与三郎翁の碑石のある付近一帯、あのあたりに七本の松の木があった）沖新田（いまの大分魚市場のある付近）芦崎（芳崎ともいった）などの呼び名があった。

小田鑄造前を少し東に行ったあたりから、新川東にかけて、道路のかたわらに大きな松の木が取り残されたように、ぽつんぽつんとつつ立っている。明治、大正ごろまでは両側にりっぱな松並み木をなしていたそうだ。

この松並み木道は藩政時代、沖ノ浜から住吉川口の「升形」(船泊まり)に通じる重要な道路とされていたのではないだろうか。沖ノ浜の漁師にとっても「升形」は唯一の船泊まりだっただろう。外来の大型の船は、「升形」付近に停泊し、この道路を通過して、仙石橋から府内にはいつていたにちがいない。また藩主の江戸参勤の船出は最初は沖ノ浜からだったらしいが、のちには「升形」から出帆したとあるから、そのためにもこの松並み木道路は美しく整備されていたにちがいない。

海岸線も変わってしまった。エビス神社の境内の根っこを波が洗っていたのはつい先だったのことに思うのである。が、もう遠い過去のことになってしまった。エビス神社そばの波打ちぎわに立つとずっと春日社の森のすそをめぐるってカンタンまで美しい砂浜が見通せたものだった。

エビス神社の向こうを埋め立てたのは朝吹亀三市長のときで、昭和十年ごろから工事を起こしたのだった。

築堤に使う石は、いまの日出町の川崎沖から、おもに運んだもので、大野川筋などの川砂を運搬する川船を雇ってきた。冬

のあいだは、大潮で沖が干上がるのは夜中になるから、石の運搬も夜の作業だった。川船の船頭さんは冷たい海水に腰までつかって石を船に上げ、寒い潮風について、エッサエッサとこいできた。元気者の浜町の漁師たちも、大野川筋の船頭さんたちの作業ぶりには、シャツポをぬいだかたちだった。

埋め立ては五万二千坪。ところが浜町の漁船の船泊まりがないので、このうち東のかどのところを二千五百坪浜町の漁業組合がもらって広い船入れとした。いまは西日本電線がその先を埋め立てて工場敷き地を拡張したが、あの船入れはそのまま、新旧の埋め立て地の間に深く入りこんで、漁船を抱き込んでいる。現在進められている臨海工業地帯の埋め立てで、この船泊まりもやがて消え去る運命にあるのだろうか。

### 難航した工場誘致

浜町沖の埋め立ては、弁天海岸の埋め立て地に誘致した日本人造羊毛工場に続いて、どしどし工場を誘致しようという計画でやったもので、臨海工業地帯の夢を大きくはらんでいた。

ところが埋め立てはしたが工場はすぐにこずに、かわいてほこりっぽくなった土地は、いたずらに砂ほこりを巻き上げた。風の強い日はこの砂ほこりが高く舞い上がって、大分市の上空をおおうありさま。近くの浜町かいわいは、押し入れの中から台所のすみまで、この砂ほこりが舞いこんだ。

「昼めしするとき、めしビツを取り出したら、フタの上はガラガラ砂がたまっていたよ」というほどだ。浜町のおかみさん連

は、この砂ほこりには、すっかり恐慌をきたした。ついに市議会にまでこの問題が取り上げられて朝吹市長は攻撃を受けた。それで、山からシバをたくさん運んできて、埋め立て地一面に敷きつめるといふ応急処置をしたりした。

この埋め立て地に一番最初に工場を建てたのは東洋鋳業製錬所（現ラサ工業製錬所）だったが、反対が多くて誘致は難航した。反対理由は、佐賀関製錬所が煙害問題を起こしたように、煙害のために西大分方面のミカン山などが被害をうける心配がある。またスズ鋳石の粉碎を海岸近くでガラガラやられると、魚が寄りつかなくなる、といったようなことだった。

すったもんだのすえようやく妥結したのが、朝吹市長辞任（昭和十二年十二月二十二日）の前日だった。

「市長も、これを置きみやげにやめるのだから…まあ、まあ」ということで、反対側がなだめられて妥結にこぎつけたのだった。「東洋工業に売り渡したときの地価はたしか坪九円ぐらいだった」と工藤虎彦さん（現大分タクシー社長）は語っていた。

東洋鋳業が操業を開始したところ、また問題が起きた。浜町沖のノリが枯れ始めたというのである。調べてみると、廃液をためるタンクは海岸から五十メートルばかり内にあつて八分通りしかたまっていない。それなのにその近くの海中の石には、廃液の影響で海草がまったくついていないのだ。

「いつも八分通りしかたまっていないのはおかしい。夜中にこつそり海の中へくみ出すのだろう」とノリ業者はいきりたつたが、そんなバカげたことをするはずもなく、いろいろ考えたあげく廃液が地下にしみこみ、海中に流れ出るのに違いないと

いうことで、タンクをずっと奥に移転させて話がついた。住民の生業や福祉との衝突で、一つの工場の誘致も容易なことではないという一つの例だ。

ところがこの埋め立て地のおかげで浜町は一つ得をしている。埋め立て地の石がきにさえぎられた波が砂を運んで、自然に土地の造成をしてくれたのだ。いまでは埋め立て地から東の方の海岸線に、およそ百メートル幅の新しい土地ができあがっている。もともと、新しい埋め立て工事が始まっているから、天然の埋め立て地もそのうち消滅してしまうだろうが…。

## 浜町っ子気質

都市の膨張は漁師町を漁師町でなくしてしまう。やがて海岸も奪い去ってしまうのだ。

「むかしは、浜は足の踏み場もないほどイリコが干されたものだよ」

としよりは、明治、大正代の、漁業の盛況をなつかしむ。

このごろは県南地方のイリコ漁の多忙ぶりが新聞などで報じられるが、浜町もあのとおりだった。豊漁になると、浜も路地もムシロが敷きつめられて、青光りのするイリコが太陽をはねかえしていた。町の中には生臭い魚のにおいがしみこんでいた。人とすれちがっても魚のにおいがした。

大きな網元が十二、三軒あっていずれも羽振りがよかった。豊漁だということになれば、網元には千両箱がころがりこむようなものだから、金使いも荒くその豪盛な生活ぶりは一般の漁

師にとつては、せん（羨）望を通りこしたものだつた。

記憶に残っている網元の名を拾うと、村山代七さん、岩田初蔵さん、森亀太郎さん、工藤和三郎さん、通称を徳十郎といった安部小三郎さん、村山松太郎さん、村上春雄さん、村上庄太郎さん、今新と呼んでいた岩田類造さん、ビツクリと呼んでいた村山三郎さんなどがある。

村上庄太郎さんのむすこの亀夫さんが、現在漁業組合長をしている。ビツクリはずっと前に浜町からいなくなつた。村山代七さんのむすこの亀生さんは現在弁天に住んで、こんどの漁業補償には相当大きな補償金を受けたといわれる。その他の人々も現在はむすこの代となつて浜町かいわいに住んでいる。

それぞれの網元には、若い威勢のいいひき子が大勢ついでいて、網船で沖にこぎ出すのだが、漁場で網を入れるさい、他の網船とけんかになることがある。そのけんかは陸にまで持ち越され、お祭りなどではでなけんかをやっていた。

しかし、そのころのけんかは、なぐる、けるのけんかであつて、いまの若いもののように、何かとうとすぐ刃物を振り回すような卑きようなまねはしなかつた。「すぐ刃物ざたにおよぶのは、あれは弱虫だからだよ。あんなのは人の風かみにおけないよ」と浜町の老人が、真の浜町っ子気質を自慢していた。

この浜町っ子が、年に一度、四月十日のエビス社の春祭りに町内対抗の舟競争をやつて、若い血をたぎらせた。

それぞれの網船（大船）に旗のぼりを立てて、町内の若い者組選抜のひき子が十二、三人ぐらい乗り組む。鱧（ろ）は一隻に五、六丁ついているのだが、一丁に二人ずつのこぎ手がつい

て、合図とともにエッサエッサとこぎ出し、沖の標識を回ってくるのだ。この行事は大正年代に消えたらしいが珍しい勇壮なスポーツだ。いつまでも残しておけなかったものか。

## 沖の浜の神々

浜町のエビスさまの祭りは、海上渡御と荒っぽいみこしで市民には親しみ深いものだったが年々さびれて、今年の夏祭りはとうとうみこしが出なかった。漁業補償のもつれで不測の事態が起ることを心配してのことだそうだが、それにしても漁師たちが豊漁と海上安全の守り神としていた神もおちぶれたものだ。

漁業ができなくなつて、沖は臨海工事地帯となつてしまえば、エビスさまも漁業の守り神を廃業してほかのご利益を考えださなにかぎり、再興の道はなさそうだ。

縁起によると、陥没した瓜生島にあつたものだが、瓜生島の住民が沖の浜に再生の居をかまえてから再び建立されたものだ

という。再建は慶安四年（一六五一年）とも正保二年（一六四五一年）ともいわれ神体はそのさい古国府の工匠利光自休という人が刻んだものだといわれている。

先日お参りしてみた



エビスさまの御手洗（挿絵：田中 昇）

ら、神前には、かつて盛んであった漁業家やイリコ業者の奉獻した石造りの灯ろうや鳥居が、漁業の町の中心をなした氏神のおもかげをとどめてはいるが、潮風にたたかれた神殿もかぐら殿も、うらぶれてなんとも心細い。御手洗いの水をはいている石造りの大ダイ（鯛）の朱色だけがみように目立っていた。

芦崎のいまの小田鑄造付近は大きな松林だったが、その松林の横、ちょうど小田鑄造の向かい側のあたりに「神明さま」という小さなおやしるがあった。

府内城主日根野吉明が寛永十七年（一六四〇年）に千代ヶ洲（いまの新川付近に住吉川と大分川分流が落ちあつて広い入り江となり、その上手にできていた大きな洲をこう呼んでいたものらしい）に創建したものを、寛文二年（一六六二年）に芦崎へ移したのだという。

「昔から沖の浜に火事がないのは、神明さまのおかげだ」

明治時代、おじいさんや、おばあさんは、孫にそういつてきかせていたそうだが、明治の末に住吉神社の境内に遷座した。いま「芦崎神社」という扁額があがっている本殿右手の小さな神殿がそれだ。

明治時代、この芦崎の神明さまの近く、いまのガス会社の西側からはいった路地あたりに、いつのころからか、よそから流れてきて、住みついた数戸のあばら屋があった。ここの住人たちは竹カゴを編んで売り、タニシのむき身を売り歩いて生活していた。大きな長方形のショウケをかついで大分の町の近郊にタニシ取りに出かける姿を見ると、こどもたちは恐ろしがって逃げた。この人たちが神明さまの近くに住んでいたせいか、こ

の人たちのことを「神明さま」と町の人は呼んだ。

そのころ芦崎の松林の中に深くえぐり取ったような低地が海に向かつて長く横たわっていた。この低地に「神明さま」たちが身を抜き取ったタニシのからを捨てていたが、そのからで低地が埋まってしまったそうだと。いまま芦崎を掘ればタニシのからが出るかもしれない。この「神明さま」たちはいつか浜町の住民の中にとけ込んで、そんな人たちがいたことも忘れられてしまった。

### 残っていた船番所

弁天橋の西のたもとの、いま織部石油の別邸となっているところに、住吉川口の船番所があった。そのすぐ背後に、高く盛り土をした上に灯ろうを立てた「灯ろう台」が立っていた。この盛り土は明治ごろまであったそうで、春日浦の蓬莱山より高かったと、土地の古老はいつている。明治、大正期の蓬莱山は、現在よりずっと高かったから、この「灯ろう台」はよほど高い小山をなしていたのだろう。

藩政時代、この「灯ろう台」に夜ごとあかあかと灯を入れて、「升形」や堀川港へはいつてくる船に、川口の位置を知らせていたのである。そして船番所は出入りの船を監視するとともに、港銭を徴収していた。享保十四年（一七二九年）に天神町の吉左衛門という人が藩の許可をえて堀川港までの川さらえをし、はいつてくる船から舟泊まり代二朱を徴収したのが港銭取り立ての始まりという。その後も、民間委託で港銭の徴収は続いた。

明治になってからも、県が民間人に入札で委託していたというので、竹町の加賀屋の弟の後藤富蔵という人が、船番所に住んでいて、はいってくる船から港銭を取り立てていた。番頭まで置いていたそうだから、いい収入があったとみえる。明治十五年にカンタン港ができ、ここでも港銭を取るようになったから、住吉川口の方も、衰微するまでは続けていたのだろう。この船番所のあつた一帯は、のちに西新町の油商関屋織部秀彦さんが買いとって別邸を建てた。現在も織部家の所有となっている。船番所の建て物は、邸内にそのまま残っているということなので行ってみた。

切り石を築いた一メートル足らずの土台の上に建ったその家は、柱もたる木も朽ちて、あちこち修理をしているが、窓の作りも、カワラも古めかしい姿をとどめていた。チョンマゲ姿の潮焼けしたおやじが、ぬつと顔を出してもおかしくないたたずまいだ。しかしもう寿命がきている。やがて取りこわされ、府内のささやかな一角の歴史をささえている石積み土台も、どこかに持ち去られることだろう。

「灯ろう台」の高い土盛りは、住吉川口が現在のように完全な築堤ができる前に、川のはんらんや、台風ごとに削り取られ、あるいは近くの埋め立てに少しずつ運び去ったりして、いまはまったくそのあとをとどめない。

出漁した父親の船の帰りを待ったり、友だちと駆け上がり駆け下っておにごっこをした、ありし日の「灯ろう台」は、いま七、八十歳の老人のまぶたの中だけになつかしい思い出として、その姿をとどめているだけである。

## 京泊の松並み木

芦崎という地名は、いまは浜町の町内に包まれて影が薄くなってきているが、地籍では「大字勢家字芦崎」は、ガス会社や、大分プロパンガス会社付近から、新川の少年保護鑑別所あたりまで、ずいぶん広い地帯にわたっている。昔の「新川」の地名は住吉川畔「升形」の近くにちよっぴりあっただけだ。一方小田鑄造の東側あたりから、大分公共職業補導所や、新川東のもの日赤病院のあたり一帯は「京泊」となっている。

この「京泊」は、大分市の歴史に深いつながりがあるのだから残しておきたい地名だが、ほとんど忘れられてしまった。

慶長十三年（一六〇八年）府内城主竹中重利が、府内繁栄のために堀川を構築して船の便を開いた。そのさい、川口に舟泊まりの港を設けて「京泊」と呼んだことは、「堀川かいわい」の項でも記した。大給藩時代多少位置が変わったとしてもその呼び名が、地名となっていまに残っているわけだ。



京泊の松

この京泊の港は、大給藩初期には底が浅くなっ  
て使いものにならなくな  
ったので大修築を加え  
正徳五年（一七一五年）  
ごろに完成した。そのさ  
いでき上がった京泊の新

港（升形）は、いまの曳船橋と新川橋の中間住吉川左岸にあったと大分市史は記している。

その後、寛政年間に再び京泊の港の改築が行なわれ位置が変わった。現在、曳船橋よりずっと下流、弁天橋のちよつと上手の左岸に、石がきで築いた方形の船入れが残っている。これが寛政の移築になる「升形」で、京泊の地名もこれに従って移ってきたものだろう。また松並み木道も、この新しい京泊から沖ノ浜にまっすぐにつけられ海から府内に入る玄関口として整備されたに違いない。

この「升形」をかこむ土手に数本の古い松の木がそびえ、遠くからもながめることができる。そのかたわらに弁天神社がある。昨年（三十七年）新川町内の人々の寄進で社殿が修築され、こじんまりとしたたたずまいで、「升形」にもやっている数隻の小船を見下ろしている。

この弁天さまは、正徳年間の「升形」大修築のさい、工事場の地鎮として松栄山の弁才天を勧請し御幣を立てたのが起り。その後、問屋や回船業者から藩に願い出て、港の守りとして弁才天のほこらを建てたという。このとき港口で投げ網をして魚を取る者がいたので、これも藩の許可をえて、「殺生禁制」の高札を立て、付近での魚取りをさせなかったとある。

## 弁天さま放浪記

弁天神社は、最初「升形」のかたわらにまつたものを、なにかの理由で大分川口に移したのか、最初から大分川口に建立

したのか、そのところは、はっきりしないが、とにかく明治の初めごろまでは大分川口にあった。

古くから、大分川口の分流に区切られた一角を弁天島と呼んでいるところからみると、松栄山から勧請したさい、船の出入りのはげしい、そして荷の揚げおろしや人間のざわめきの絶えない「升形」のそばよりも、はるかに船の出入りを見守っておられる大分川口の清浄な地を選んだのかもしれない。

大分川口の、いま「水はかり場」のあるところよりもやや上手に、小さな半島のように川の中に突き出ている一角があった。その上側から大分川が分流して、住吉川といまの弁天橋付近でつながり、弁天島をへだてていたのである。

弁天さまは、その半島の先端の巨大な岩の上の石のほこらに鎮座していた。そして年に一度、にぎやかな祭りも行なわれていたという。この祭りには、ほっ立て小屋の売店ができ、竹町付近の店も小屋に品物をならべたそうだ。がんらい竹町あたりの店は、明治ごろまでは各地の祭りや、市が立てば、たいいてい小屋をたてて出張売りをしていたのである。

また祭り中は「バクち場」も弁天さまの境内にひそかに開帳されて、府内のお金持ちのどんな方が、手遊びにやってきたという。

この弁天島の弁天さまが、どういう理由からか新川の方へ移された。移された年月もつまびらかでない。大洪水で弁天島が荒らされ、弁天さまが鎮座しておれなくなったのか、祭り中のトバク開帳など、よからぬことのために取り払われたのかだろう。

明治の中ごろにはいまの弁天橋ぎわの織部別邸の庭に、石のほこらが放置されてあった。さらにその後近くの民家に移されるなど冷遇されていたのを新川の人たちが「升形」のそばに安置したのである。

戦後まで、石のほこらは雨ざらしになっていたが、これも新川の人たちがよその神社の社殿をもらってきてその中におさめた。

弁天島にあった人造羊毛会社は、戦災で焼けてしまつて、戦後は、無残な廃きよをさらしていたが、その廃きよの中に、皇大神官かなにかをまつた会社小さな神社だけが焼け残つていた。「あれを放っておくのは惜しい。利用させてもらおうじゃないか」というので、新川の人たちが、弁天さまのお住まいにと、運んできたわけである。いらい、弁天さまは社殿の中に安どしておさまつておいでになる。昨年修築したから、ますますおよろこびだろう。

もともと「升形」のためにお迎えした神さまだ。ここが一番いい。

## 別府からガスを引く

浜町から新川にかけて、いまのように人口がふえたのは戦後のこと。大正年代には浜町の菊屋米穀店のあたりからまっすぐに中島方面まで見通せた。いまの小田鑄造付近から海岸にかけては、大きな松林があり、大分プロパンガス会社のあるあたりは広い墓地だった。

この墓地は、春日町のいまの工業高校のところにあったもので、明治の末に、あそこに大分県立物産陳列所を新築したさい、大きな共同墓地だったので分散移転させた。そのとき、勢家、浜町、新川一帯の人々が所有する墓を芦崎のあき地に移したのである。そのさい春日町の墓地にあった宝蔵寺という庵寺も同時に芦崎新墓地に持つてきた。大正十年に新川で開いた九州沖縄八県連合共進会のときは、この墓地にかこいをして会場から見えないようにしたそうだが、それから間もなく生石町の裏山ヒイノクチというところへ移してしまった。

そのあとに、大分では初めてのガラス会社ができビンの製造などをしていたが、あまり長く続かなかつた。いま細工町にある多田ガラス店の先代は芦崎のガラス会社にいた人で、会社が解散後独立して堀川にガラス店を開き、のち現在地に移転したのである。

別府ガス大分工場ができたのは意外に早い。明治四十三年に小野駿一さん、山田耕平さん、桑野額造さんらが豊州ガス会社を設立し、工場を別府に設けて、翌年から、まず別府にガスの供給を始めた。ついで大分まで長々とパイプをひいて大分市内へ供給を開始した。当時はいまの大分工業高校の西側付近に小さなタンクを設けて、別府からパイプで送りこんでくるガスをため、そこから市内に供給していた。ところが、別大電車線路のすぐそばをパイプが走っているので、電車の震動でパイプが痛み困ったそうだ。それに大分の需要もふえてきたので大正七年に芦崎に大分工場を設け、初代大分所長に福島信彦さん（現所長岸田嘉夫さんのおとうさん）が赴任してきた。

豊州ガスが別府ガスに変わったのは大正十四年。大阪のヤマヂイゼルが買収してからで、県外資本が県内資本にとつてかわったわけだ。

でっかいガスタンクがすわったときは、あのあたりは畑ばかりで、道路も勧銀前から北は通っていなかったのだ。その田園地帯のまん中に赤いタンクがそびえた姿は、大分市民の文化生活の先駆を象徴するにふさわしいものだった。

昭和五、六年ごろ、ガスタンクの近くの商店から出火し、タンクのそばの事務所も類焼したことがあった。あのときは、ガスタンクに引火しないかと、市民はひやりとしたものだった。畑のまん中に建ったガスタンクが、市の発展とともに民家にとりまかれてしまったので、こんな心配も起こることになったのである。

### ひき船に乗って

堀川から王子町を抜けて走っていた電車が浜町、春日浦を走るようになったのは大正の末。ところが移ってきた電車通りのために浜町は南北に両断されてしまった。新川に車庫ができたのは、それからずつとのちの昭和四年。それまでは堀川の車庫に、旧軌道を通って出し入れしていた。

新川橋は、いまでもこそ交通量の多い大切な橋になっているが、もともと電車軌道が浜町に回ったために、軌道用に作った橋だ。それまでは、あそこに橋はかかっていなかった。

住吉川にへだてられた新川、浜町方面は、橋をかけなければ

不便を感じるほどには人家はたてこんでいなかったのである。だから住吉川には、住吉神社前の仙石橋から下は橋が一つもなく、市の中心部に用事のある人は仙石橋を回っていった。もともと、あるていど人家の集まっているのは浜町の西寄りの方だったから、中心部への往来は仙石橋だけでじゅうぶんこと足りていたわけである。たいして回り道でもなかった。

曳船橋



住吉川から東の方は中島裏で、畑とクワの木の地帯だ。弁天付近に少しばかりある農家に用事があるか、中島裏で耕作をするか、あるいは釣りざおをかついで遊びに行く以外に用のあるところではない。

しかし、芦崎付近の農家で、中島裏に耕作地を持っている者が、仙石橋を大回りするのはたいへんなので、いま曳船橋のかかっているところに、渡し船を設けてあった。渡し船といっても船頭のいる船ではない。「ひき船」と呼ぶ長方形の箱船で、トモもミヨシもなければサオもついていない。両端に川幅の長さの綱がついていて、これを両岸にくくりつけてあるだけだ。渡る人は水ぎわに茂ったアシをかきわけ、船を引き寄せて飛び乗り、綱をたぐつてえっちら、えっちら渡つてゆくわけである。この「ひき船」が姿を消して、橋になったのは昭和の初めご

るだった。その橋の名は「曳船橋」。命名者はだれかしらないが「ひき船」の思い出を永久に残したとは風流な人だ。

あの「曳船橋」のやや西の方に行ったあたりから「升形」の近くまで、带状に土地がやや高い。昔からちよつとした大水ぐらいでは、他は水につかっても、ここだけは島のように残ったものだそう。だから畑ばかりだった新川かいわいでは、ここだけに数軒の農漁家がかたまつて建つていた。これが新川住人の草分けだ。

いま市議会議長をしている川上勘一さんとその一族も昔からここに住んでいる。勘一さんのおとうさんの利作さんは、働き者の多い沖ノ浜の人々でさえ、いちもく置くぐらいの勤勉家で尊敬を集めていた。

「利作さんのように……」といえ、畑仕事にしても漁をしても、まず普通の人の二倍は働く人の代名詞になっていたそうである。

## 競馬と共進会

いま岩田鉄工や佐藤電気商会のある一帯は、明治から大正にかけて競馬場だった。年に数回県下から自慢の馬をひっぱりつけて競走させた。もちろん競馬用に改良されたやつではない。ひごろは耕作や馬車に使っているような馬ばかりだ。

競走中に、回りかどを回りそこねた馬が、サクをのり越えたり、ぶつつかってサクをへし折つたりするのはしよつちゅうだった。そのさい転落した騎手が折れたサクに胴を突き破られ

て、ひん死の重傷を負ったこともある。走る馬から転落して大ケガをする騎手も少なくなかった。ところが近くに医師もいないし、遠くまでかかえてゆくこともできないので、競馬場の近くの農家にかかえこんで応急手当てをしていた。いままも新川東にある山崎富吉さんの家などは、負傷者の収容所のようなものだった。

競馬のないときの競馬場は沖ノ浜かいわいのこどももの天国だった。春はツバナが芽をふき、ヒバリが巣をつくって高くさえずった。夏の宵はマツヨイ草（月見草）が一面に、まるで夢のように咲きみだれた。マツヨイ草は鉄道線路わきとか、川の土手など、荒れ地によく繁茂する。線路わきに咲くので「鉄道花」の異名をつけているところもあるときいたが、沖ノ浜かいわいのこどもは、「競馬の花」と呼んでいたそうである。

この競馬場も大正十年の九州沖繩八県連合共進会場となったために、中島の大分川土手ぎわに移転した。そこも昭和九年に城崎グラウンド建設用地となつて追われ、大分市から競馬場はなくなった。

九州沖繩八県連合共進会は、大分市としては歴史的な大行事だった。第一会場が県庁（府内城）、第二会場が新川、第三会場が西大分の築港という大規模なもので、その中でも新川の会場が主力だった。

いまの大分石炭会社のところが会場正門で大アーチが建ち、東は大分石炭がいま貯炭場に行っているとこのはしまで、西はガス会社の裏あたりまでの幅でずうっと海岸までが会場となっていた。

場内には各県の展示場と即売場が幾むねも建ち並び、サーカスや、パノラマ館など入場者の目を楽しませる小屋もあった。海浜の会場では佐賀関から海女を招いて沖で実演させ、とつた魚貝を即席料理にして食べさせるという趣向もあった。当時ああたりの沖に洲ができていたが、その洲の上で共進会の余興として花火大会も催された。

夜、沖で網を入れていた漁師が、すぐ近くの洲で突然花火が上がり始めたのでびっくりぎょうてん、漁などそちのけにして花火見物をしたそうだ。

当時高田保さんが大分市商工会の会長で、共進会の会長もやっていた。はで好きな高田保さんが、大阪の飛田遊郭に演芸会に出演する芸者をよこせと頼んだら、遊廓の女将が五、六人の芸子さんを引きつれて応援にかけつけたということも関係者の話題となった。

多い日は二万人からの入場者があったというから、当時としてはいかに盛大な催しだったかわかる。

## 大分川築港論

大分の玄関口として出船入り船でにぎわった住吉川口(新川)や堀川港も、新時代の港としての要望にこたえるにはあまりに規模が小さい。それに土砂に埋まって、すぐ使いものにならないくなる欠点がある。それで、明治十五年にカンタンに築港を新設したわけだが、同じ金をかけて築港を作るなら、大分川口にしたらどうかという世論もあった。

港が市の中心部から遠く離れていることは、市の発展を遅らせるというのが理由で、それに、貨物の運搬も、乗降客の往来も不便であるというのだ。そこで、大分川口の一方に遊廓街を作り、倉庫や運送店も軒を並べて大いに港の形態を整えたら東九州の有力な玄関口となるだろうというわけだ。遊廓街が港の形成に必要な役割りを持つていると考えていたのも、当時の時代的背景がうかがえておもしろいが川口港はいくつも例のあることだし、大分港を大分川口に建設していたら、大分の発展の様相ももっと変わっていたかもしれない。

明治十四年の統計から、大分付近の河港のもようをみると次のようになる。

大分町堀川に船問屋二十七、運船三、同京泊に運船十九、今津留村下ノ川に船問屋一、運船三、津留村花津留口（裏川）に運船八、原村堀川（原川口）に船問屋四、運船十六、三川村鶴河に運船十四、乙津村乙津港に船問屋十三、運船十六、鶴崎町三軒町（大野川）に船問屋十三、運船六。以上が大分付近の重要な海上運輸の基地だったのだ。この中で住吉川口（京泊）や堀川が最も繁栄していたことは船問屋の数からもわかる。

カンタン港はできたが、これは住吉川口の「升形」を少し大きくした程度のもので、帆船が出入りできるだけ。汽船はまったく入港不能で、貨客はハシケで沖に停泊した汽船と連絡しなければならなかった。それで新しい築港の建設を県営でやることになり、明治四十四年に起工し、大正四年に完工した。この築港の石積みにはコンクリートブロックがたくさん使用されている。

その製造を新川の浜でやって、運んだのだった。そのために弁天から西大分まで海岸にそって長いトロッコ線路ができた。弁天の砂を新川の浜に運んで、ここで「人造石」（と当時の人はいつていた）を作つて、トロッコで新築港にどんどん運んだ。もちろん当時は白砂青松の海岸線が西大分まで美しくつらなっていた。その海浜に沿つてえんえんと延びたトロッコ線路を、小さな機関車がトロッコを引っぱつて往復する風景は一幅の絵であった。

弁天や新川、浜町沖のノリ栽培は、そんな大工事のすんだずつとのちのことである。弁天が大正十四年からぼつぼつ始め、新川、浜町が本格的になったのは戦後、昭和二十五年からである。臨海工業地帯の造成で、市民に親しまれたノリ網の風景も消えてゆくが、思えば短い寿命だった。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

## デジタルブック版「大分今昔」 第十四章 ● 浜町かいわい

2007年11月16日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

### 著者略歴◇ 渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。  
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。